HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イギリスにおけるメリヤス工業の実態
Author(s)	伊藤, 俊夫
Citation	北海道大學　經濟學研究, 18, 1-35
Issue Date	1961
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31067
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_P1-35.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

イギリスにおけるメリヤス工業の実態

伊藤俊夫

一、序説

イギリスにおける繊維工業については、綿業、化学繊維工業などについては、きわめて精緻な分析や実態調査などが行なわれているが、それも主として紡績の段階までであつて、織物の段階になると、資料そのものが少ないように思われる。況や編物の範疇にぞくするメリヤスについては猶更のことである。ここでは、このような数少ない資料の一つとして、シルヴァーマン H. A. Silverman のメリヤス工業論 The Hosiery Industry (Silverman (ed), Studies in Industrial Organization 1946 所収)の大要を紹介することにしたい。ただ惜しいことには、資料の大部分が戦前ないしは戦時中に限られていて、戦後の新らしい資料が欠けていることである。この点をいくらか補足するものとしては、プールおよびリリウエリン A. G. Pool and G. G. Llewellyn の『イギリスメリヤス工業論』があるが、次の機会にこの書の紹介をすることにしたい。しかしメリヤス工業の基本的な性格の認識にとつては、戦前から戦後にかけて本質的な変化は見られないといつてよい。その意味では、この論文の資料的価値は少しもそこなわれるものではない。

ところでメリヤス工業は、どういう企業かというと、長靴下およびソックス（イギリスでは普通 hose および half-hose とよぶことが多い）、編下着、編外衣（ファンシイ・メリヤスをふくむ）、編手袋、ネクタイおよびメリヤス

生地の製造を行なつている企業をさしている。編物と織物との根本的な相違は、経糸と緯糸のよりあわせによつてでなく、一つの糸からつくられたループ loops の掛合によつて生地がつくられるということである。このような編生地は織生地に比べると、はるかに弾力性があり、上に述べた製品にとくに好適である。

このような編生地を購入して衣服を仕立てる企業は、イギリスではメリヤス工業と区別して light clothing にふくめられている。生産センサスでは、メリヤス工業は繊維産業 textile trades に分類されているが、仕立業とは全く区別されている。織物に関連せる工業では、製織過程と衣服製造との間には、はつきりした区別がある。しかし概していえば、メリヤス工業の大部分では、糸から完成品の生産まで持続的に生産が行なわれることが多く、このような技術的特質がその産業構造の上に反映しているわけである。

メリヤス工業は、そのなかには多かれ少なかれ編立原理は共通しているけれども、その他の点ではかなり異なつた技術構造をもつた部門から形成されているものである。例えば、編外衣を専門としている工場は、婦人のレーヨン靴下を専門としている工場とは全く異なるし、同じ靴下でも、フルファッションとシームレス靴下（縫目なし靴下）では、製造の設備も行程も全く異なつている。下着の生産に従事している工場もメリヤス工業のなかでは、独立の分野を形成しており、同じことは外衣の生産にもあてはまる。またメリヤス工業のなかには、編生地だけを専門に生産しているものもあるし、編立から完成品の仕上げまで行なつているものもあつて、メリヤス工業内部の厳密な分類は必ずしも容易ではないといつてよい。

イギリスのメリヤス工業は、これまで確実に成長してきている。第二次世界大戦前の一五年間に、雇用者数は一〇万人足らずから一三万三千人に増加した。同じ期間に綿業の労働人口は、五二万五千人から四〇万人に減少しており、羊毛工業では二七万五千人から二二万五千人に減少を見たわけである。メリヤス製品の総生産額の増加と主要製品の

相対的重要性の変化をしめしたのが、第一表および第二表である。

これらの表によると、これらの期間の生産数量は増加しているにもかかわらず、生産価額は、一九二四年から一九三三年までは寧ろ減退傾向をしめしている。これはこの期間の不況のためであつてメリヤス製品に限つたものではない。しかしメリヤス製品の価格の下落は一般物価の下落以上深刻であつたことが注目される。

尤もメリヤス製品の価格の低下には、種々の要因がある。例えば婦人用下着の価格は、従来のような羊毛の代りに綿とかレーヨンを代用するようになつている点や、昔よりもずつと軽い生地が利用され、また短い形のものが需要されているためでもある。

それと同時に、メリヤスの製造技術そのものの著しい進歩も見逃してはならない。メリヤス工業の初期に比べると、根本的な技術革新が行なわれているというわけではないが、部分的な技術の進歩が累積的効果をあげているわけである。すなわち例えば、糸そのものの品質がよくなつたばかりでなく、編立速度

第1表　主要メリヤス製品の生産価額　　(単位 千磅)

	1924		1930		1933		1935		1937	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
長靴下およびソックス	19,867	46	17,032	43	16,142	41	16,066	38	18,370	40
下着	10,824	25	11,084	27	10,881	28	10,743	26	11,682	25
外衣	11,046	25	9,754	24	9,436	24	9,721	23	10,027	22
その他	1,749	4	1,799	4.1	2,757	7	5,907	14	5,984	13
計	43,486	100	39,669	100	39,216	100	42,437	100	46,073	100

第2表　主要メリヤス製品の生産高　　(単位千打)

	1924	1930	1933	1935	1937
長靴下およびソックス	25,400	24,029	29,358	31,176	35,981
下着	6,514	8,509	11,398	11,627	12,789
外衣	4,067	4,392	5,247	5,064	4,901

が増加し、糸が切れたときでも自働的に機械をとめる装置も導入されている。機械の精度や操作の容易のために、不熟練労働の雇用も可能になつたので、この側面からも生産費低下の可能性が生じたわけである。編立ばかりでなく縫製部門でも、ミシンの速度は一分間に四〇〇〇回以上動くようになり、電力回転裁断機の普及も生産費の節約に寄与している。染色とか整理の部門でも、同じように機械化が進展し、生産費の節約に貢献しているわけである。なおメリヤス製品の価格の低下に関連のあるのは、両面編 interlock fabric の特許権が満期になり、それによつて低廉な綿の下着が普及するようになつたわけである。この種の製品は、丈夫で着心地がよいのでこれまで特許権の所有者に莫大の利潤をもたらしたものであるが、特許権の期限の当来とともに、ひろく一般にこのような生産技術が採用され、自由競争の結果かなりその価格が引下げられたわけである。

外衣やフアンシイ・メリヤスの生産は、かなり確実に伸びてきていることは、前掲の表によつて明らかである。この種の製品は、どちらかというとスタイルが重要性をもつ衣料品である。したがつて大規模生産の可能性は、比較的限定されているといつてよい。この種の製品のなかには、今だに手動式の横編機に依存しているものがあるといわれている。生産費の大部分は、新らしいスタイルの考案とか市場の変化する需要に適応せしめるための工夫に費されている。

ところで、主要メリヤス製品間の相対的な重要性について見ると、前掲の表でわかるように、靴下（長・短）の地位は高いけれども、一九二四年に比べると、一九三七年にはその相対的地位は低下している。靴下生産の増加は、約五割で外衣の二割五分に比べると高いが、下着のそれは、実に殆んど二倍になつていることが注目されるのである。このような下着生産の増加は、その需要が価格の低下および消費者所得水準の上昇によつて増加してきたためである。勿論外衣に比べると修理によつて下着の耐用年数は長いわけであるが、価格が低下し所得も上昇していくと、更新がもつと頻繁に行なわれるし、ストックそのものが増加してきているといわれる。そして下着の種類も季節的変化に照

応して増加しており、とくにランジエリイの利用増加は、下着の総需要に相当大きな影響を与えているとおもわれる。婦人ばかりでなく、子供の下着需要も増加してきており、家庭でつくられるよりも、より多くできあいを購入することが多くなつている。

前述したように、靴下の生産はそれ程顕著ではないが、それでも注目に値いするものがある。この場合には、短かいスカートの着用が、靴下えの需要に影響を与えている。またいろいろの色物の靴下の生産によつて、靴下の品種の増加が見られるようになつたわけである。

外衣の需要は、靴下や下着に比べると緩漫であるが、それでも、フアンシイな外衣の需要は婦人用ばかりでなく、紳士用のスポーツ用シヤツ、プルオーバーのような形で需要増加に寄与したわけである。外衣の生産増加は、かなり流行の変化を反映している点もあるが、それはある程度は他の繊維品を犠牲にしている点もある。そしてまたそれは所得水準の上昇に伴う衣料支出の増加をも意味しているわけである。

以上のようなメリヤス工業に関する素材の数量およびその割合については、かなり重要な変化が起つている。すなわち、一九三五年には、イギリスのメリヤス工業は、綿糸四〇六万二千磅、羊毛八四七万九千磅、絹一四八万三千磅、レーヨン三一九万七千磅を消費し、それによつて生産された素材別製品の数量および価額は第三表に示す通りである。

第3表　素材別に見た主要メリヤス製品の数量と価額

(1935年生産センサス)

	綿		羊毛		絹		レーヨン		計	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
靴下	4,168	1,332	12,495	6,167	4,838	4,542	9,675	4,025	31,176	16,066
下着	6,852	4,322	2,383	3,726	49	165	2,343	2,530	11,627	10,743
外衣	554	553	4,203	8,684	13	30	294	454	5,064	9,721

註　1)　数量の単位は1,000打
　　2)　金額の単位は1,000磅

この表に関連していえば、毛の下着は一九二四年に比べて、一九三五年には殆んど増加していないのに、綿の下着生産は、同じ期間に殆んど二倍に増加し、レーヨンの生産は一九三〇年から一九三五年の間だけで三倍に増加しているのが注目される。靴下については、勿論綿や毛の代りに、絹やレーヨンが代用されていることはいう迄もない。一九二四年から一九三五年の間に、絹およびレーヨンの靴下の生産は約三倍に増加している。毛の靴下の二割の減産は、おそらく期待していたものよりも少なかつたといわれている。これはセンサスの報告で毛の靴下として記載されている品目は、流行にあまり関係のない紳士用および子供用ソックスを主として網羅しているためである。

メリヤス工業は、他の衣料工業と同じく季節的変動の激しい産業で、それが雇用量にも大きく作用するものである。戦争直前に労働省が行なつた家計費の分析によると、男女とも十～十二月に衣料品を購入することが多く、婦人の場合には今一つのピークは、春である。メリヤス製品の生産は、このような季節的需要に制約されるものである。年の始めの二カ月は、卸売業の店卸や小売業の清算売出しのために一般に低調で、気候がゆるやかだと春衣や夏衣の予約注文が始まるときまでこの低調がつづくといわれる。最近では、フアンシイ・メリヤス、スポーツ着、海水着などの夏向の生産を育成するような努力がなされているが、それにもかかわらず夏期は最もメリヤス工業の低調な時期で、八月をすぎて初めて秋向、冬向の生産に忙殺されることになる。このようなメリヤス工業の季節性による労働需要の調整は、もつぱら操業時間の短縮に依存することの多いのが特徴的であつて、婦人労働に依存することの多いこともこのような操短制度と密接な関係のあることも見逃してはならない。

二、メリヤス工業の立地

多くのほかの繊維工業と同じように、イギリスのメリヤス工業は比較的少数の地域に集中しているといつてよい。

一九三五年の工場の分布は第四表に示す通りである。この年には、レスター、ノッチンガムおよびダービイの東中部諸州は、工場数で全体の五六%、労働者数で六四%、生産高で七一%をしめていた。この地方のメリヤス生産高の約半分は、レスターシヤでつくられている。

メリヤス工業のいま一つの中心地は、ホウウィックと蘇格蘭西部であるが、主として毛製品をつくつている蘇格蘭のメリヤス工業は、一九三五年には、総生産額の一割余で、労働者の雇用数も大体同じ割合であつた。蘇格蘭の工場数は、イギリス全体の六分の一であつたので、この地方の工場の平均規模は中部諸州のそれより小さく、また労働者一人当りの生産性も低くなつている。

東中部地方就中レスターシャとノッチンガムシヤとは、歴史的にもふるく、メリヤス工業では群を抜いた中心地である。一六世紀の終りに靴下編立機を発明したウイリアム・リイ William Lee は、ノッチンガム近くのカルヴァートンに住んでいたといわれる。しかしそれが急速に伸びるようになつたのは、消費市場の中心であつた倫敦であつたといわれている。この東中部地方のなかで、レスターシャの羊毛は長いステープルで編立によく適していた。ノッチンガムシャやダービイシャでは、ハーグリーブスおよびアークライト式の綿紡機の導入が、この地方での綿メリヤス製造を促進せしめた。絹は主としてダービイで製造されるようになつていた。ホウウイックや蘇格蘭では、レスターシャと同じように羊毛製品に重点がおかれていた。

第4表　メリヤス工業の地理的分布　(生産センサス)

	工場数(10人以上雇用)	総生産額(千磅)	純生産額(千磅)	平均雇用者数	雇用者1人当り純生産額(磅)
中部諸州	524	27,714	11,805	74,079	159
大倫敦	78	2,107	986	6,230	158
ランカシアその他	70	3,146	1,307	9,544	137
西部中央蘇格蘭	79	1,651	807	7,334	110
その他の蘇格蘭	86	2,162	1,229	9,372	131
総計	939	39,486	17,262	115,273	150

しかし、このような素材の性格による製品の特化は暫定的なものであつて、一般的な趨勢としては、糸の混紡が行なわれるにつれて、特殊な素材えの依存は次第に減少してきているといつてよい。

東中部地方向の糸の供給は、勿論そんなに遠距離から供給するわけにいかなかつたが、毛糸や編糸の大部分のものは、ヨークシャおよびランカシァから供給されていたのである。レーヨン糸の供給も比較的近くの工場から供給されていたわけで、イギリス人絹会社の工場は、ダービイにあつたし、Courtaulds の工場もスタッフオードシャのウオルヴァーハムプトンとかワーウイックシャのコヴェントリイにあつたわけである。

この東中部地方にメリヤス工業が集中化するようになつたのは、染色整理、編立機の製造のような独立した企業が発達したためである。また糸商その他の商社が発達し、地方的なメリヤス製造業の団体とか商工会議所の支部なども設置されたことも預つて力があつたといつていい。企業に必要な資本は大体地元で賄われ、工場は低廉な動力と外に就業の機会のなかつた婦人労働者の豊富な供給を確保することができたわけである。外の工業の場合と同じように、メリヤス工業でも労働の供給は立地を決定する重要な要因であつて、熟練労働を必要とする場合には都市にその給源を仰がなくてはならないが、そうでない場合には農村にその給源を求めるのが有利である。交通の急速な発達によつて、婦女子がこれらの農村からレスターとかノッチンガムなどのメリヤス工業の中心地え通勤することが容易になつたために、比較的小さな都市えの工場立地が有利となつたわけである。また外に有利な工業の存在しない地方などでは、メリヤス工業の勃興は、その地方の経済安定に寄与することの大きかつたことも見逃すことができない事実である。

それはともかく、メリヤス工場の設置については、いかにこの東中部地方が有利であつたかは、一九三三―三七年に、イギリス全体で五五の新設工場のうち、四〇工場がこの地方に設立されたことからも明らかである。しかもその

大部分がレスターの地域であつたわけである。また同じ期間に工場の拡張を行なつたものが三〇であるが、その分布も工場の新設の場合と大体同じ割合である。同じ期間に閉鎖した工場は八八で、工場の新設および拡張よりやや多くなつている。これらの新設拡張および閉鎖した各工場の規模に関する資料が欠けているので、これ以上立入つた分析は不可能であるが、東中部地方のメリヤス工業における中心的性格は論らないであろう。

この地方に次いで注目されるのは、蘇格蘭である。蘇格蘭のメリヤス工業は大別すると二つの地方に分れる。一つは東部でその中心はホゥウイックであつて、下着と外衣の生産が中心となつている。これらの企業はどちらかというと高級品で、直接小売店に販売されている。これに対し、西部では、グラスゴーとキルマルノックを中心にして、東部より小規模な企業が中級品の生産を行なつているわけである。その製品はもつぱら卸売商社を通じて小売店に販売されているわけである。ダンフリーズおよびアバディーンには、毛の手袋業が発達しているが、一九三九年以前から衰退を見せている。

蘇格蘭のメリヤス工業の生産規模は、東中部地方に比べると、ずつと少さく、蘇格蘭全体でも、普通五〇〇人以上を雇用する企業は六つをこえないといわれている。ホゥウイックにあるものおよび他の一、二の中心地にあるものを除くと、工場の技術は東中部地方程高度化していないし、設備の大部分は手動式だといわれている。

その後イギリスの他の地方には、生産技術の変化が見られたが、メリヤス工業の伝統的な主産地以外えの発展として注目されるのはランカシァ地方（チエシャ、ダービイシャのうちのグロソップおよびニューミルス地区）である。すなわち、一九二四年のランカシァのメリヤス工業の企業数は、一〇人以上雇用のものが四四であつたが、一九三〇年には五二にそれが増加し、一九三五年には七〇に増加したのである。また雇用者数の平均は、一九二四年の三、五〇〇人から一九三一年の七、〇〇〇人、一九三五年の九、五〇〇人えと増加したわけである。ランカシァ地方のメリヤス

生産量は、依然大きくはないけれどもかなり急速なその成長はおそらく伝統的な古い中心地え大きな影響を与えるものと考えられている。

ランカシァその他の新らしいメリヤス地域でのメリヤス工場の開設は、一九二四年と一九三五年の間に、企業数又は工場数で五〇二から五二四え二二の増加をしめし、雇用者数も、六八、二五〇人から七四、〇〇〇人えと増加をしめし、東中部地方の企業からは複雑な感情をもつて眺められたわけである。したがつて、中部地方の生産者のなかには、伝統的な地域に集中しないでもつと分散した方がいいという進歩的な見解をもつ人々もいたわけである。しかしランカシァの企業で生産される両面編が一打六シリング九ペンスないし七シリング九ペンスでうられるのに対して、中央地方ではこれよりも一シリングないし二シリングたかく生産費がかかるというように、ランカシァのように新らしい産地が競争力をもつていることは明らかであつた。ともかく、ランカシァのメリヤス工業発達の理由は、この地方で糸の供給があり、綿工場を利用する便宜があるためでもあるが、とりわけ、低廉な婦人労働を利用し易いためであるといわれている。綿業の賃銀は、一般にはメリヤス工業の賃銀より安かつたが、そのメリヤス工業の賃銀でさえ東中部地方の賃銀に比べると三分の二とか、ときには半分にすぎないといわれているわけである。またランカシァのメリヤス工場では、中部地方に比べると少年少女の労働の割合が多かつたことも両地域の賃銀格差を大きくした原因である。議会の両院共同工業委員会でもこの問題を検討したが、その回答は、ランカシァのメリヤス工業の賃銀は、労働者の大部分の給源である綿業の賃銀に比べると高いということであつて、このことは中部地方の賃銀の一般基準を低下せしめようとする低賃銀に対する適当な理由とは見なされていない。

イギリスの海岸よりの都市などでは、小規模ながらメリヤス工業の発達が見られ、従来の手動式の編立機の外に、横編機が導入されて優良品の外衣の生産が行なわれている。ニュークエイ、ブライトン、ヤーマウスその他の都市に

は、この種の工場が設立され、海岸の工場のなかには、大きな百貨店と密接な関連のある企業によつて所有されているものもあるといわれている。新らしいメリヤス工業は、この外に大倫敦地域とかその周辺の諸州でも大きな拡張が行なわれてきている。ここで注目されるのは、勿論、倫敦市場の流行品、誂え品とくにフアンシイな外衣である。市場に近接していることは、輸送費の節約だけではない。その外に個人的に接触できるとか、市場より一歩先んじる能力がえられることによつて需要の変動をすみやかに把握しうることである。ことに流行品を生産するには絶えず新らしいラインを創出しなくてはならないわけである。大倫敦地域では、このような流行品ばかりでなく、長靴下の大規模生産なども行なわれているが、この種の製品の立地上の有利性はもつと一般的のもので、倫敦がとくに有利というわけではない。ただメリヤス工業の立地として、倫敦地域の最も不利な点は、染色整理業の欠けていることだといわれている。この問題は先染糸を使用している外衣の生産には直接関係がないし、そういう企業がこの地域には多いわけである。消費市場からの距離は、メリヤス工業の立地を決定する要因の一つであるが、流行品以外では、例えば靴下とか下着の生産は、比較的市場よりはなれたところでも充分経営がなり立つもので、ベルフアストにそういう工場を開設した企業もあるといわれている。

三、メリヤス工業の構造

メリヤスに用いられる素材は、綿、毛、絹、レーヨンおよびこれらの混紡糸で、糸はふつう糸巻 bobbin にまかれる過程でなめらかにされ、生地をいためたり針をいためるものはとりのぞかれるわけである。編立機は大別すると横編またはフルフアッション機と丸編機の二つになる。前者のうち横編機は外衣、下着の一部などに利用され、フルフアッション機は専ら長靴下の生産に用いられる。後者の丸編機は主として生地の生産にあてられ、直接完成品をつく

るものではない、この外、レース編とか両面編とか添え糸編などには特別の機械が必要であることはいう迄もない。またそれぞれの機械の型についていろんなゲージ（インチ間の針の数）があつて、それによつて生地の細かさがきまるわけである。一般にゲージは細かくなつていく傾向があるといわれており、この傾向はとくに絹とかレーヨン靴下の生産の場合注目されるわけである。

糸から完成された衣料品をつくつていく行程は、染色をのぞくと同一のメリヤス工場で行なわれるのが普通である。靴下の生産は、編立後の生産行程は比較的単純で、とく別のミシンで縫目をつけ、それから染色にうつり、型付乾燥のあとで、靴下の色合と長さを調整するフオールデイング Folding が行なわれる。婦人用肌着の製造は、一層単純であつて、これらの製品は、わづかのコースの畦がある間隔をおいて編立てられる丸編生地からつくられることが多い。

その他の衣料品は、多かれ少なかれそのなかにいろいろの仕立行程が入つてくるので、やや生産過程が長くなる。裁断した生地に、縫目つけ、ボタンつけ、飾りつけ（レース）など特殊のミシンが用いられる。そのあとで型付やフオルデイングが行なわれる

第5表　メリヤス企業の規模別分布　（生産センサス）

平均雇用数より見た規模	企業数又は工場数		総生産額（千磅）		純生産額（千磅）		雇用者数（社外労働者を除く）（千磅）		雇用者1人当り純生産額（千磅）	
	1930	1935	1930	1935	1930	1935	1930	1935	1930	1935
11– 24	180	181	1,081	959	406	429	3,186	3,088	127	139
25– 49	196	242	2,339	2,861	940	1,207	7,006	8,486	134	142
50– 99	189	216	4,796	5,690	1,854	2,307	13,428	15,561	138	148
100–199	126	162	6,559	7,550	2,585	3,272	17,877	22,346	145	146
200–299	40	50	3,344	4,114	1,425	1,831	9,461	12,136	151	151
300–399	21	30	2,906	3,706	1,183	1,595	7,291	10,603	162	150
400–499	10	20	2,011	2,908	805	1,288	4,566	8,933	176	144
500–749	21	23	4,482	4,715	1,820	2,015	12,412	13,941	147	145
750–999	9	9	3,649	2,474	1,481	1,231	8,303	7,618	178	162
1000及それ以上	12	6	8,277	4,509	3,855	2,087	21,880	12,561	176	166
計	804	939	39,444	39,486	16,354	17,262	105,410	115,273	155	150

のが普通である。

次にメリヤス工業の構造上の大きな特質は、その中小規模であるという点である。経営の規模および生産額は第五表に見るごとくであるが、一九三〇年と一九三五年とは前者が企業別、後者は工場別に調査したもので、直接の比較はできないが、規模別分布の実態をかえるものではない。これによると、一九三五年には従業者を一〇人以上を雇用している工場が九三九あり、一〇人未満を雇用している工場が三六六で、併せて一、三〇五工場である。このセンサス統計にもれた工場が一〇〇あるいはそれ以上あるといわれている。一〇人以上を雇用している工場総数のうちで、一九三五年には、約五分の一は一〇～二五人で、一〇～五〇人の階層は半分以下で、一〇～一〇〇人の階層は、約三分の二である。一九三〇年の企業の分布は、小規模えの分布が増加している外は別に変っていない。これに対して、一、〇〇〇人およびそれ以上の階層では、一九三〇年に記録されているのは、一二企業であったが、一九三五年には僅か六工場となっている。しかし、一九三〇年に一、〇〇〇人以上を雇用していた一二企業は、一九三五年には所属工場別により小さい階層に区分されたために、実質的には大規模企業や工場が減少したわけではない。同じ理由で一九三五年に一〇人以上を雇用する工場九三九は、一九三〇年の八〇四から一三五工場がふえたというわけではない。

ところで、雇用者一〇人来満の工場をふくめた一九三五年の工場総数のうち、全体の六〇%、すなわち七八九工場は、いづれも雇用者五〇人未満のものであつた。これらの工場の純生産額は全体の一〇%にすぎない。雇用者一〇〇人未満の工場数は全体の七七%でその純生産額は全体の二五%にも足りなかつた。雇用者二〇〇人未満の工場のそれは全体の四二%、また三〇〇人未満の工場のそれは全体の五二%にすぎなかつたわけである。

このように大規模経営とならんで小規模経営が多い理由は、小額の資本で開業しやすいためである。編立機も割賦購入を行つたり、中古品を手に入れることが可能である。とくに編立機の小型の手動式を用いる外衣の生産は、全く

小資本で経営が可能なのである。したがつて、新規にあまり経験のないものでもメリヤス製品をつくる技術的な条件や経営的な条件にはそう大きな障碍は存在していない。勿論大規模企業でなければ、ゆたかな資金がなければ実験のできないものとか、莫大の経費のかかる市場調査といつたものがあるが、あたらしい個人の創意とかアイデイアを生かしていくラインを制作する機会は、比較的小規模の企業でも不可能でなく、このようなアイデイアが特許権によつて保護されるならば、競争上の有利性は当分維持されるわけで、おそらく新らしい企業の多くのものは、大低このような条件のもとでこの種の有利性をもつて発足するものである。しかしながら、このように一方では小規模企業の成立が簡単であるために、とくに好景気のときに創業したものは、前途の長期間的な見通しについての判断をあやまり、一度不況に際会するとそれをのりきるだけの資力をもたないことが尠くないものである。さらに又、零細企業になると、技術的な最適規模以下で生産を行ない、その不利な点をわづかな外の有利性でカバーするような状態であるけれども、もつと高度の競争的な産業で生きのこりうるならば零細企業も伸びていくかもしれぬが、現実には、零細企業の新陣代謝はかなり激しくなつていると見てよい。

　こゝことは、メリヤス工業の技術的な最適規模は如何という問題提起にもつながつている。単位当りの生産費が最低となる理想的な生産規模は如何といつた設問に答えることは容易でない。若干の留保条件が用いられなくてはならないが、一つの目安は第五表の生産センサスでしめした雇用者一人当りの純生産額である。一九三〇年の調査報告では、小規模の階層から四〇〇～四九九人の階層まで生産額のかなり確実な増加をしめし、五〇〇～七四九人の階層で急にそれが減少し、それを超えると大体もとの水準に再び上昇していることが分る。これに反して、一九三五年の調査では、規模の拡大に伴う生産額の上昇はそう確実でもないし、また鋭くもない。雇用者一人当りの純生産額の最低は一九三〇年に比して高いが、最高は寧ち一九三〇年より低く、初めのピークは二〇〇～二九九人の階層で、それか

ら五〇〇～七四九人の階層までは、急激な減少をしめし、そのあとは再び上昇している。

このような中規模と大規模との間の階層の純生産額の減少は、メリヤス工業に特有のものではなく、他の繊維や衣料の生産にも見られるものである。また規模の階層区分そのものにも問題があるがそれを考慮しても、規模の拡大とともに純生産額が正比例しないことは経験によつても立証される事実である。工場がある一種の製品だけでなく、多数の製品をつくる一、〇〇〇人以上の大規模なメリヤス工場の場合には、只一種の製品しかつくらない小規模経営の生産費と比較を行なうこと自体が誤つているわけである。というのは、この場合には大規模企業のある製品の生産規模は必ずしも小規模企業のそれに比べて大きいとは限らないわけである。例えば、ノッチンガムの一企業およびレスターの一企業は、いづれも四、〇〇〇人以上の雇用者を有しているが、約二〇の生産部門に分れているので規模による節約はあるけれども、実際の生産規模では、より小さな規模の企業に比べて著しい優位性をもつているわけではないといわれるのはこのためである。それにもかかわらず、最大規模の階層における労働の生産力が高くなつている一つの理由は、これらの企業のなかには、年間フルに操業し、ピーク時期には、注文の大部分を小規模企業に下請せしめ、閑散な時期にはそういう下請を減少する方針をとつているためである。直接間接雇用されている人のすべてを計算のなかにいれると、労働の生産力は大企業自身の工場に雇用している労働の生産力よりはずつと少なくなるわけである。

メリヤス工業の最適経営規模は、製品の種類によつても異なり、例えば、高度に製品が特化され、且つ流行によつて左右され易い場合には、一〇〇人とか五〇人という規模でも完全な節約を確保することができるが、その製品がそう高度化するに及ばず、しかも長期間にわたつて継続的な生産が可能な場合には、その最適規模は、二五〇～三〇〇人という規模になり、この規模以下では、労働ならびに工場を有利に利用する全体的な作業計画は立ちにくいわけで

ある。またこの規模以上では、管理および監督の困難が生じてくるのである。

この国最大のメリヤス会社の指導者の語るところでは、ふつうの製品の場合には、経営者は大体三〇〇人の労働者を掌握しうるが、そうでない場合には、これ以上の労働者を掌握することは困難であつて、多数の製品を生産する場合には、一カ所の工場で生産するよりも隣接せる工場かもしくは小規模の工場を数カ所たてて多数の製品を生産した方が能率的であるということである。フルフアッション靴下の場合でも、ある専門家は、生産の規模は労働者三〇〇人が限度であると述べているのも右の場合と同じ理由によるものである。それに附随して労働の供給もその理由の一つにあげられている。

また労働者の交代制度が用いられるところでは、資本設備に対する雇用労働の割合は大いに異なつてくるし、それによつてまた企業の最適規模が変つてくるのは当然である。雇用者の大部分が婦人で、夜業の行ない難い場合には、交代制度はある限られた範囲にしか行ないえないことになる。この制度とは別に、必ずしも標準化されたわけではないが、その製品がかなり劃一的な場合には、最適規模は三〇〇人以上となることも可能である。したがつて、流行の変化にかかわりのない短靴下や下着の生産を専門とする工場では、年間の操業が継続的で、特化された製品をつくる工場に比べて、分業がより多く導入されるわけである。メリヤス工業で全面的に実行可能な大量生産はこの種の工場で行なわれるものである。例えば、レスターでは、ある大きな工場は、下着およびそれに準ずる製品を一年中生産しているが、その大部分は中級品および低級品を扱う連鎖店その他の小売店に販売されるのである。この種の製品は勿論その目方とか細かさには季節的な変化はあるけれども、過剰生産になるという危険は少ないものである。しかし、大量生産は中級品および低級品に限られたものでなく、毛の下着の高級品をつくる大企業もあつて、価格の高いにもかかわらず年間需要があると見ると、年間規則正しく大量生産を行なつているわけである。

メリヤス製品のなかで、最も標準化された形態といえば、それはメリヤス生地の生産で、年による変動もそうあまりないと言われている。しかし、この種の製品は、メリヤス総生産額の八分の一にすぎないことを想起しなくてはならない。この種の製品の生産計画とか監督はそうはげしい緊張を与えないので、工場の規模はかなり大きく、平編生地の場合には、最適規模は六〇〇人程度で、とくに有利な場合には、それ以上に達することもあるわけである。

メリヤス生産においては、多数の生産過程の垂直的な企業合同によつて、技術的な最適規模が拡大されることになることが多い。これに対して生産過程を分割していく傾向はこれまであまり発展していなかつたわけである。けだしメリヤス工業では、編立から完成品までの一貫作業が多く、企業合同によつて一層その有利性が維持されるからである。しかしながら編立過程と仕上過程とを調整することはなかなか容易でないので、綿業において紡績と紡織とが分割されているように、この二つの生産過程が分化する傾向のあることも否定できないわけである。しかしこのような傾向の前途は、メリヤス生地の標準化の可能性に依存しているといつてよい。編立業で用いる糸の種類が多いことは、ノッチンガムのある大きな企業は二〇〇カ所の紡績から糸を購入しているということからも窺知されるように、糸の標準化が難かしく、編生地の標準化もそう簡単でないことが理解されるのである。

メリヤス工業の生産過程の統合で注目すべきものは、染色仕上部門である。一般に季節的変化や流行の変化に左右され易い染色過程は、メリヤス工業に共通の隘路であり、その経費もかかるので大企業でなければ経営が困難であつて、中小企業は寧ろこの作業だけを専業者に外注する方が経済的であるといわれている。否大企業でさえ独立の染色業に外注する方が有利であるともいわれている。例えば、レスターの最も大きな企業の一つは、自己の染色部門をもつているにもかかわらず、受注の一部を蘇格蘭に送つている。そこではレスターよりも染色仕上がよくできる場合があるためである。これは蘇格蘭の染色業の技術が秀れているためである。それには、物理的気象的条件がいくらか関

係があるといわれているが、これらの企業はとくに大規模化しているために優秀な技術がもたらされたともいえる。しかしイギリス全体としては、矢張りレスターシャおよびノッチンガムシャで染色が行なわれることが多いといわれている。

メリヤス工業の生産過程統合の事例として興味のあるのは、自家生産の機械で製品を編立する部門とか工場をもっているごく少数のメリヤス機械製作者の場合である。これらの製品は、大部分は仕上業に販売される編生地であって、このような組織は、ある意味では編立業者自身が機械工でもあるわけで、近代的な生産方法とはいえないものでもある。一般にこの種の編立部門や工場は、あまり有利なものではないと見られているようである。

これまでの分析では、最適規模の概念は、もつぱら全企業ということでなく、工場を中心に考察してきたので、勢い技術的な要因が主としてとりあげられたのである。多くの場合、企業規模の拡大に伴って工場は外延的に拡がっていくが、一般に現在の状態では、企業はこのような技術的な最適度に達するのにはあまりにも小さすぎる状態であり、しかもこのような中小規模企業が大企業と対抗しているのは、特殊の有利性や個人的な諸要因にもとずくものと考えられる。それはともかく、全体としての企業の最適規模は、技術的な生産単位の工場のそれに比べると、はるかに思弁的であるといつてよい。このことは、製靴業などと異なつて、メリヤス工業の内部構造は、きわめて複雑なためである。生地、下着その他多かれ少なかれ標準化される生産に集中化する場合は別として、メリヤスの生産構造はもつと複雑で、どちらかというと、特化よりはむしろ多様化、総合化の方向に発展しつつあるといつてよいであろう。けだし、季節的な変化、流行の変化などから見て、ある特定の製品に集中しないで、多種類の製品に分散した方が完全であるからに外ならない。かくして前にも述べたように、企業はある形態の製品では、最適規模が三〇〇人とか、ときには六〇〇人という推計が成り立ちうるとしても、編立以外に仕上げ部門がある場合には、最適規模の基準は一層複

雑なものとなるし、これらの部門がそれぞれ完全な能率を発揮しうるとしても、全体としての企業が最大の能率を確保するのに充分な整合化が実現できるどうかは、保証しがたい点である。種々なる生産部門の不均衡的な発展が、一般的な企業全体の能率に対して逆の効果を与え易いのは、このような過度の部門分化によるものである。

企業合同によるメリヤス工業の発展は、戦前には、それ程大きくはないし顕著でもなかつた。レスターやノッチンガムでも、この種の運動が起つたが不成功に終つている。しかしてこのような合同運動の成果は、規模の拡大にもとずく節約ということよりも、寧ろ所有とか政策を統一しうる点にある。メリヤス生産者の高度に個人的な性格が、このような企業合同を不可能にしている一つの要因と考えられるし、最適規模の節約は、大規模よりもずつと低い規模で実現されるという事実にも基ずいている。このような物的な企業合同の外に、はつきりではないが、生産ならびに流通機構を通じて、編立工場と紡績工場との金融的な競合が見られる。またメリヤス生産者のその製品の卸売および小売業の間にも、密接な融資関係が見られるわけである。勿論このような系列支配は大きくそれが発展しているわけのものではない。一般的には、イギリスのメリヤス工業では、アメリカのように企業合同が行なわれていないといえるであろう。

四、メリヤス機械

メリヤス機械のメーカーは多くない、主として東中部地方にある六社は、この国のメリヤス機械の生産を支配しているといわれている。この国で使用されている丸編機は、大部分イギリス製である。フルファッション靴下用の大きなコットン式編機の約八〇%は外国製である。この機械の大規模生産は、ドイツおよびアメリカで行なわれていたわけである。平編のシームレス機（縫目なし長靴下機）は、戦前は主としてアメリカ製で、シームレス機のなかには、

イギリスの生産者が部品を海外からあつめてつくつたものがあるということである。多年にわたつて、イギリスからは丸編機その他のメリヤス機械が輸出されたことがあるが、激しい海外の競争、関税、世界の政治的不安などで戦前には漸減していたものである。第一次大戦中のイギリスのメリヤス供給の減少で、多数の輸入国では、メリヤスの生産を奨励したので、ドイツは機械貸附・販売制度で、そういう国え大量のメリヤス機械を輸出したのである。イギリスのメリヤス市場であつた海外諸国でのメリヤス生産は、このような形で伸びていつたものである。一九二八～三〇年の不況に、ドイツのメリヤス機械はかなり海外にひきとられたが、その後一九三二～三三年には中古品のフルファッション機の輸出をおさえるために重税を課したことがある。

国内市場向けの機械業者間の競争は、かなり激甚をきわめていたが、流行のはげしい変化がその大きな原因であつたことも否定できない。しかも機械の部品の分化は、ある種のメリヤス部門では不必要なほど高度に発展していたようである。このように、一方では新らしい機械が絶えず製作され、考案されていく反面、比較的非能率的な機械がスクラップされずに、他の企業に譲渡され、新らしい企業者は生産費を切り下げるために往々そういう手段を採用することもあつたわけである。金融上の資力のゆたかな企業は、そういう古い機械を自らスクラップすることが多い。メリヤス工業全体としては、勿論スクラップされるものよりも新規に導入される機械の多いことは当然のことである。そしてメリヤス工業の設備能力としては、ピークのときでも充分需要を超過している状態である。この超過率は大体二〇～二五%であると見積られている。

メリヤス機械の複雑さと、型の多様性で、用いられる編針の種類も多く、一九四〇年の調達庁の調査では、イギリスだけで生産される編針は七〇〇を超え、全体ではおそらく一、五〇〇に達するものと見られている。これは前にも述べたように、老朽化した古い編機が利用されているためでもある。これらの編針は、かつては、アメリカ、カナダ、

ドイツなどから輸入されたことがあるが、現在では需要の大部分がイギリス国内で生産されているわけである。

五、労働力とその補充

メリヤス業に雇用されている被保険者数は、戦前十五年間について見ると、九万三千人から一二万人に確実に増加していることが、第六表から明らかである。

これらの労働者のうち約九%は、事務とか管理にあたるものである。このような増加の趨勢は、地域により異なり、ランカシャのような新興地域は、東中部地方よりずつと伸びが早く、反対に蘇格蘭では、英蘭の約三分の一にすぎないといわれている。このような雇用者の大多数は女子であつて、戦前の平均は大体八〇%強である。第六表に見るように、一九二四年と一九三九年の間に、本質的な変化はない。蘇格蘭で

第 6 表　メリヤス工業における被保険者数　(16～64 歳)

労働省調査　毎年7月現在

	男　子	女　子	計
1924	20,330	73,080	93,410
1925	22,200	75,500	97,700
1926	21,190	76,700	97,890
1927	22,190	79,000	101,190
1928	21,390	81,480	102,870
1929	22,180	83,600	105,780
1930	23,520	84,430	107,950
1931	23,730	88,510	112,240
1932	25,210	88,990	114,200
1933	25,260	88,790	114,050
1934	26,460	91,010	117,470
1935	26,070 (1,820)	89,360 (11,810)	115,430 (13,630)
1936	26,690 (2,010)	91,740 (12,690)	118,430 (14,700)
1937	27,150 (2,100)	92,720 (11,980)	119,870 (14,080)
1938	26,890 (1,620)	(91,820 (10,900)	118,710 (12,520)
1939	27,850 (1,830)	(92,950 (11,350)	120,800 (13,180)

註　(　)内の数字は 14～15 歳の少年少女(被保険者)数をしめす

は、女子の割合はいく分高く、平均八五％である。とくに東中部地方では女子の大部分は既婚者であることが注目される。正確な数字は得られないけれども、レスターおよびノッチンガムでは、女子の六〇％は同じく既婚であるといわれている。

次にメリヤス生産過程における男子と女子の労働の配分を見ると、それは生産過程の型によって異なっている。しかしそれは決定的のものではない。しかし概していえば、ミシンかけ、縫目つけ、止め編みなどは女子が行なっている作業である。同じ地方でも編立の配分が異なることがある。例えば、ヒンクリイでは、編立は全部が男子であるが、ほんの数哩はなれたラッフボロウでは、その大部分は女子の労働となっている。大規模なフルファッション機の編立は、全部男子によって行なわれるのは、単に伝統的なものでなく、機械の操作・修理などに専門的な知識を必要とするためである。シームレス靴下の場合には、その労働が半熟練的性質のものであるから、男子の熟練労働とともに女子が雇用されることが多い。

メリヤス工業の就業者のうち、一九三五年には、その約二〇％が一八歳未満であり、この年齢層では、男子一に対して女子は六以上であるといわれている。第六表の一九三五～一九三九年の一四～一五歳の少年少女数を見ると、この低年齢層における少女が少年に比べていかに圧倒的に多いかが分明するであろう。

次にこれらのメリヤス工業の賃銀について述べると、地域によってかなり差があるが、その基準は時間でなく出来高制である。一般に、ランカシャ地方の賃銀は、東中部地方に比べるとかなり低いといわれているようである。そしてメリヤス工業のある部門、例えば、両面編、フルファッション靴下およびフルファッション下着では、くわしく賃銀表があつて、同一労働同一賃銀制が男女ともに支払われている場合がある。しかし女子は男子に比べると、機械の取扱台数が少ないので勢いその週給は、男子に比べると低くなっているわけである。

メリヤス工業における労働力の補充については、規制がうまく行なわれているわけではない。そして、例えばヒンクリ地方のように徒弟制度によつて補充を行なつている少数の事例をのぞくと、少年少女がメリヤス工業労働に就業することはきわめて自由であるといつてよい。大企業のなかには、雇用者に対する教育や訓練を行なつているところもあるが、それは全国的だとはいえない。しかし、レスターやノッチンガムのようなメリヤスの中心地の大企業の多くは、このような制度や施設の必要を認めて、技術教育の課程を履修する従業員に対しては、授業料を援助しているものがある。労働者側の代表もこの種の教育や施設に対しては全面的に支持を表明しているといわれている。

ところで、メリヤス工業のなかでも、美術的なデザイン部門では、熟練労働の不足が問題とされている。勿論この種の専門的技術者の養成のためには、メリヤス工業の中心地にある工業大学に俟つところが多いが、こうい専門的技術を専攻するものは少ないということである。

次にメリヤス工業における就業について見ると、外の工業に比べて失業ということが少ないことが特色である。好景気の場合でも、フル運転でなく、時間の短縮が行なわれるのが普通である。なおメリヤス工業の各生産部門間の労働需要の調整はなかなか容易でなく、そこに一時的な失業や時間の短縮が必要となる理由が存在しているわけである。

メリヤス工業の労働組合運動はあまり活潑ではない。かつてはメリヤス工業の各部門に一二以上の組合があつたといわれているが、合同の結果その数は少くなつている。これらの労働組合の組織化を高めることの容易でないのは、婦人労働者の多いためである。レスターのような中心地でも、労働組合に加入しているものは労働者の三分の一にすぎないといわれている程である。

メリヤス生産者の団体は主要生産地にあつて、これらの団体のうち九つは、レスターにその本部がある全国メリヤス製造連合会 National Hosiery Manufacturers' Federation に加盟しているわけである。メリヤス生産者は、それぞ

れの地域の地方団体に加盟しなければならないわけである。この連合会は、戦前には、メリヤス生産の七五%をしめていたが、企業数ではそれより少なかつたといわれている。戦後には、生産の八五%をしめるようにその地位は上昇している。この連合会に加盟していない団体が三つあるが、その一つは、蘇格蘭西部にある組合、一つは、マンチェスター商工会議所所属組合、一つは、イギリスメリヤス製造業組合 British Hosiery Manufacturers' Association である。最後のイギリスメリヤス製造業組合は、本部もレスターにあつて、一九四一年に設立され、多数の中小メリヤス業が加入していたものである。すなわちそれは戦時の統合の際に中小企業者の利益を代表する機関として発足したものである。したがつて、多くのメリヤス生産者は、前述せる連合会にも加入しているし、またこの中小企業の組合にも加入している。これは企業の規模による利害関係の相違は昔ほどには明日でないためであろうとおもわれる。

六、メリヤスの販売

メリヤス工業の流通機構は、劃一的なものでないが、生産費に比べて販売費の割合が高いのが普通である。正確な数字は得られないが、一九一四年以前には、メリヤス製品の九〇%は、卸売業の手を経て分配されていたものである。その後生産者から小売業えの直接販売が急激に伸びていつたのである。そして卸売業を経由するものは殆んど半分に減少したといわれている。このような生産者から小売業えの販売形態にも二つの典型的なものがあることが注目される。一つは、大規模生産とは限らないが、あらゆる種類のメリヤス製品を小売業に販売する多くの企業であり、他の一つは、連鎖店とか百貨店向に主として生産を行ない比較的限られた範囲のメリヤス製品を大量に販売する企業である。この二つの外に自己の小売店に販売する少数の企業があるわけである。

一九一四年以前のことをいうと、メリヤス製品の八〇%というものは、別に商標とか何とかいつたものなしに販売

されたもので、今では、その反対となつている。広告の発達と商標の普及とは、一面において流通機構における卸売業の相対的没落と小売業えの直接販売制の拡大と密接な関連をもつていることが注目されるのである。このように卸売業の地位は漸減しているが、卸売業のマーケッテイングの計画上重要な役割を演ずることに渝りはない。大手の小売業の需要は、直接生産者より配給をうけるには余りにも小さすぎることがあるし、他方流行の変遷によつてデザインや色彩の要求が複雑化してくるので、そういう要求に応えるためには、中心的な卸売業が必要となつてくるものである。

このような卸売業の機能の一つは、生産者に比較的大口の注文を行なつてそれを小売業に分配することにあるが、この大口の注文が漸次小口化しつつあるために、その機能の一つが失われつつあるといわれるわけである。このことは、メリヤス製品の形態によつても異なるが、流行品のように需要の変化の激しいものの在庫をできるだけ少なくし危険負担をさけようという意図に外ならない。卸売業は生産者の商標に対しては、あまり好意を示していないのが普通である。というのは、このことは、小売業えの生産者の直接販売の意図をしめすか、もしくは広告費の増高から見て、卸売業に低い交易条件を受諾せしめようとの意図をしめすかいづれかであるからである。一般に卸売業のマージンは、商標のないものについては、二五%、商標のあるものいついては、一五%というのが普通である。この種の卸売業のなかには、自己の商標品をとくに小売業によけい売りこもうとしたり、多くの同業者との競争にうち克つために小売業を所有または支配したりしようとするものがあり、またこのような卸売業および小売業と生産者とを結びつけるものとして、依託売買人 commission agents が存在していたが、このような仲介機関の経済的機能は今では殆んど失われてしまつているといつても過言ではない。

直接小売業に製品を販売するメリヤス生産者は、次第に増加しているが、そのなかには全国各地に代理店をもち、

多数の出張員をもつている大きな企業もふくまれている。メリヤスの製品別に見ると、絹およびレーヨン靴下のおそらく半分は、生産者から直接小売業に販売されているといわれている。この種の美しい靴下製品は、その商標による広告を通じて販売されるので、卸売業の必要が少ないためと見られている。その他の製品のことは、シルヴァーマンも論及していないのでよく分らないが、このような直接販売制度は、中小企業では困難であり、大企業でも従来のような卸売機構を通ずる配給を有利とするもののようである。なお注目すべき例外はあるけれども、このような生産者が卸売機能を兼ねている場合の利潤は、生産のみを行なつて製品を卸売している大企業の利潤に比べると、平均してそう大きくはないことが指摘されている。

概していえば、以上のような製造兼卸売という形態は、独力で配給したり、自己の名称で販売する製品のすべてを生産するというわけではない。けだし製品の種類は増加しつつある反面、流行の変化は激しいので、すべての生産設備を据えつけまたすべての労働力を稼働せしめる程採算のあうものではない。したがつて、この種の生産形態では、主として重要商品 staple goods に特化し、つねに安定的な需要のある製品に特化する傾向がある。したがつて自己の生産するこれらの重要商品 staple goods 以外は、他の企業に下請せしめるか、あるいは既製品を購入して自己の商標をつけて販売するものである。この種の生産者相互の間の取引も普通行なわれていることはいうまでもない。

既に述べたように、メリヤス生産者が小売部門を直接経営している場合はそう多くはない。ある一つの有名な企業は、全国にまたがり、羊毛およびメリヤス店をもつているが、編立ばかりでなく、紡績も行なつている点で例外的であるといわれる。しかしこの企業は自己の工場で生産する製品でも間にあわないのでかなりの金額の製品を外部から購入している状況である。またある企業は、主として絹およびレーヨン靴下の販売のため、主な地方に約五〇の店舗をもつているが、このような組織は大きな発展性があるとは考えられないものである。けだしメリヤス店では、同時

に多種類のほかの製品をも取扱うのが普通だからである。

メリヤス製品の小売形態についてそれぞれどのような割合でメリヤス製品を販売しているかについては、参考に資すべき適当な資料がない。シルヴァーマンの推定では、おそらくその八〇%以上は、独立の店舗とか専門店（単位商店）unit shops および百貨店で販売され、その残りが連鎖店で販売されているようである。専門店は、メリヤス製品の大部分は卸売業を通じて仕入れるもので、商標品のかなりの部分は、直接生産者から仕入れることがある。これらの unit shops は、傾向としてはメリヤスの高級品に特化しつつあるけれども、大多数のものは依然として低級品を取扱つているようである。メリヤスを扱う百貨店にも二つの形態があつて、一つは競争的な価格水準で大量販売を目的にするもので、他の一つは、高級品の市場の要求に応じていこうとするものである。前者のあるものは、どちらかというと、製品の種類や仕入方法などから見て連鎖店組織によく類似しているといつてよい。これらの百貨店のなかには、卸売機能を行なつたり、或いは生産者と特別の協定を結んで販売費の節約を行なつているものが少数ではあるが存在している。これに反して、流行品専門で国内の他の地方の小売業と何のつながりのない百貨店では、そうい流行品の売上げでは、専門店 union shops よりも劣つているようなこともないわけではない。

連鎖店は、ある大きな百貨店とともに、メリヤス製品の配給上重要な役割をしめており、したがつてメリヤスの生産組織にもある程度影響力をもつているものである。この国最大の連鎖店は、戦前には六ペンスという価格の制限があつたので、最も廉価なメリヤス品しか販売しなかつた。それで価格制限が五シリングであつたこの国第二の大連鎖店ほどメリヤス工業に対する衝撃は大きくなかつたといわれている。この連鎖店は、戦前には二三六の支店をもち、メリヤスはその全部で販売されていたものである。この連鎖店は国内ばかりでなく海外の製品も輸入して販売していたが、靴下以外のメリヤス製品の約九五%はイギリス国内産のものであつた。しかしフルファッション靴下について

いうと、戦前は約半分が輸入品であつたといわれている。

このような連鎖店の大量販売は、その価格に反映している著しい節約を伴うものである。ふつうの小売店に比べると絶えず顧客に対するサーヴイスが行なわれ、広告費もできるだけきりつめられている。またスペースの利用も工夫されて無駄のないようにされている。

しかし、産業の構造という点から見て、もつと重要なのは、連鎖店とメリヤス生産者との関係である。メリヤス製品は、直接生産者から仕入れるものであるから、連鎖店が生産者と協力して素材やスタイルを研究し、場合によつては製品の種類を集中化することによつて経営の合理化をはかることが可能となるわけである。すなわち限定されたメリヤス製品の標準化によつて、生産者はある期間安定的な生産を継続することが可能となるわけである。

七、海外との貿易および競争

ほかの繊維産業とは対照的に、イギリスのメリヤス工業は、海外依存度が少ないものである。一九二四年の統計ではメリヤス製品の輸出は生産量の約一五%で、この割合はその後急激に減少し、一九三九年以前にすでに七%をわり、平均価額は二五〇万磅であつた。毛の靴下は、戦前には主要輸出品であつたが、一九三八年の輸出は、一九二四年の三分の一にすぎなかつたし、その価額も五分の一に減少したのである。このようにして、一九三〇年代のメリヤスの輸出は大体低い水準におちついていたということができる。詳しいことは、第七表および第八表に示す通りである。

なお第九表で明らかなように、主要メリヤス製品の輸入には重大な変化をしめしている。例えば主要輸入品であつた靴下の輸入は、一九三一年までは、大体二〇〇～三〇〇万磅であつたが、一九三二年の関税によつて、輸入は七五万磅を下廻るように激減している。その後再び靴下の輸入は増加したが、一九三一年の水準には達していない。次に外

第 7 表　主要メリヤス製品の輸出　　(千磅)

		1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931
靴下	綿	554	570	619	408	373	407	270	163
	毛	8,755	4,007	3,529	3,257	3,049	2,777	1,082	1,090
	人絹	428	578	660	134	143	169	149	122
下着	綿	487	434	353	343	299	282	243	212
	毛	755	685	480	482	433	419	338	234
	その他	30	63	72	68	50	58	42	34
外衣及びファンシイメリヤス	毛	962	1,155	1,316	1,314	1,296	1,270	955	685
	綿	57	50	45	49	49	59	51	33
	その他	174	212	214	186	176	190	121	64

		1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938
靴下	綿	161	152	137	110	109	130	102
	毛	859	757	696	659	771	913	773
	人絹	162	163	142	116	101	95	87
下着	綿	247	252	249	254	301	304	248
	毛	198	193	200	186	234	274	228
	その他	91	101	165	153	189	195	151
外衣及びファンシイメリヤス	毛	644	647	630	628	783	977	834
	綿	27	29	30	27	31	72	63
	その他	30	24	22	25	23		

第 8 表　生産に対する主要メリヤス品の輸出割合　　(%)

		生産に対する輸出の割合	国内市場におけるイギリス製品の割合			生産に対する輸出の割合	国内市場におけるイギリス製品の割合			生産に対する輸出の割合	国内市場におけるイギリス製品の割合
靴下	1924	20.5	86.4	下着	1924	10.7	76.8	外衣	1924	11.2	90.4
	1930	13.8	76.9		1930	4.9	74.9		1930	9.5	87.4
	1934	7.6	91.0		1934	6.2	94.0		1934	7.1	95.3
	1935	6.3	91.2		1935	6.7	96.3		1935	7.3	95.5
	1937	6.8	88.8		1937	6.6	96.0		1937	10.0	93.9

第 9 表　主要メリヤス製品の輸入　(千磅)

		1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931
靴下	綿	695	618	941	1,279	1,090	1,797	1,767	1,521
	毛	74	61	62	102	69	102	66	59
	絹				494	454	393	276	233
	人絹	1,281	1,940	1,100	504	611	923	1,307	1,508
下着	綿	1,403	1,559	1,333	1,289	1,320	1,169	1,235	732
	毛	70	66	49	45	51	52	54	63
	その他の繊維	124	128	39	121	97	97	153	265
外衣及びフアンシイメリヤス	毛	164	180	233	288	294	287	515	645
	綿	55	43	37	37	64	126	355	378
	その他の繊維	623	431	62	51	15	18	14	30

		1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938
靴下	綿	254	386	311	269	285	304	290
	毛	9	14	18	10	16	20	19
	絹	108	92	109	192	264	365	416
	人絹	298	635	649	692	980	1,170	1,322
下着	綿	214	166	212	162	127	128	92
	毛	18	7	5	5	10	14	14
	その他の繊維	41	20	14	6	7	7	6
外衣及びフアンシイメリヤス	毛	164	175	106	145	350	307	181
	綿	35	78	69	33	34	82	82
	その他の繊維	7	9	3	3	10		

衣とフアンシイ・メリヤスの輸入は、やはり靴下と同じように、一九三二年には急激に減少していることが分る。輸入品の素材の最も大きな変化は、綿の減少と絹およびレーヨンの増加ということである。例えば綿下着の輸入は、一九二五年をピークとして、一九三一年には急激に減少し、一九三七年には、一九二五年の一割にも充たない状況である。綿靴下の輸入の減少は、絹およびレーヨン靴下の輸入増加を上廻るものであつたといわれている。

この絹およびレーヨン靴

下の競争は戦前から抬頭してきたものであるが、イギリスで使用されるフルファッション靴下の約五〇%が海外から輸入されたわけである。とくに絹およびレーヨン靴下の輸入増加は、国内生産者に大きな恐怖を与え、一九三八年には、フルファッション靴下の関税引下の要求が輸入関税諮問委員会に提出されたわけである。シームレス靴下については、勿論そういう要求はなされなかつた。要求者の説明では、一九三〇年から一九三七年の間に、この国の絹およびレーヨン靴下の生産は価額で一〇〇万磅から三五〇万磅に三倍の増加で、数量では六倍の激増を示したものである。これは絹の価格が一封度二一シリング六ペンスから一二シリングに低下したことや靴下の目方が減つたことに基くものである。これらの製品の増加で、雇用者数も二、〇〇〇人から九、〇〇〇人に増加したといわれており、生糸は主として支那、日本および伊太利から輸入されたが、撚糸は大部分イギリスで行なわれた。レーヨン糸の九八%は国内で生産されたものである。このようなイギリスの絹靴下と対抗するのは、ドイツ、アメリカ、カナダ、チエコおよびフランスであり、レーヨン靴下の競争国は、ドイツ、チエコ、アメリカ、ポーランドであつた。これらの絹およびレーヨン靴下の競争国の範疇は二つである。一つは、低賃銀国、とくにチエコ、ポーランド、程度は低いが、ドイツがこれで、レーヨンもの一足で、一シリング一一ペンス、絹もの一足二シリング一一ペンスの小売価格で販売されたのである。他の一つは、高賃銀国でアメリカ、カナダ、フランスがこれにぞくし、三シリング一一ペンス以上の高級品を生産する諸国である。一九三〇年の統計によると、純絹下の輸入の殆んど半分は、ドイツ製で一打三〇シリング一一ペンスであつた。一九三一年の緊急輸入税法によつて、イギリスの靴下の生産は一九三四年までは順調に伸びていつたが、同年にはドイツおよびチエコからの輸入が増加してきたのである。アメリカ資本が関係しているカナダからの輸入も増加したのである。とくにドイツでは輸出奨励金（四%）がこの海外輸出に拍車をかけていたもので、チエコの生産もドイツの資本および労働の移動によつて強化され、この両国からの輸入増加がイギリスの靴下生産者に直接大

きな打撃を与えたものである。

八、戦争とメリヤス工業

戦争がメリヤス工業に与えた衝撃は一様でなく、必需品的なもの、とくに軍需用とか労働階級向のものは、事情の許す限り完全操業に近い生産をつづけたが、流行品とか非必需品の生産は生産の制限を行なわざるをえなかつたわけである。しかし設備制限にもかかわらずその割には生産は減少しなかつたといわれ、生産者は価格効果のためもあつて概して戦前よりも恵まれた状態にあつたといわれている。

第一次世界大戦中のメリヤス工業の経験が、第二次大戦中にも繰返されたが、また別の点では第一次大戦のときとは異なつていたのである。第一次大戦には、これまでイギリスに依存していた諸国でメリヤス生産が行なわれたため、イギリスのメリヤス工業は過剰設備をかかえたが、第二次大戦中にも海外の軍需もそう大きくなかつたので、メリヤス工業の集中化が行なわれるまでは、やはり過剰設備をもつていたわけである。

軍需用の多かれ少なかれ標準化された製品とともに、実用衣料品 utility clothing の導入は、素材の特化における単純化と並んで、デザインや生産過程の単純化に導いたのである。長靴下だけでもこれまで二〇〇種にも及んでいた色合は、わづか六つに制限されたことも注目すべき戦争の影響であつたと考えられる。

やがて一九四一年には、政府はメリヤス工業の集中計画を樹立し、従業者二〇人未満の工場（全生産額の約四%をしめる）は、希望すればこの計画に編入されたが強制はされなかつたのである。仕立部門は当初は計画に入つていなかつたが、その後衣料製造業が一般に集中化されたときに一緒に編入されたものである。メリヤス工業の構造の複雑なことと製品の多様性のために中核的企業に企業を集中することは、容易なことではなかつたわけである。最も普通

の集中方法は、吸収企業が合併された成員のすべてに代つて生産を行なうという方法である。しかし吸収された企業が吸収企業の工場や設備で自己の製品を生産することもしばしば行なわれ、ある場合には当初の意図に反して政府は機械の移駐をみとめたこともある。また中核的企業が吸収される企業の製品を生産しえないとか、機械の移駐もできない場合には、吸収する企業から補償金を与えられることもあつた。ある場合には、多数の設備を有する企業は、自己の組織内部で集中化がみとめられたが、自己の過剰設備に等しい他の設備を獲得してそれを閉鎖する方法は実際にはそれ程実行しえなかつたようである。

ところでメリヤス工業では、企業集中がつねに経済的に有利とは限らないので、軍需用には大規模をあて、メリヤス用には中規模をあてるという集中方法には、疑問があつたわけである。メリヤス生産量が減少したのであるから、中規模工場にすべての製品を集中することも可能であつたわけであるが、この方法は実際にはとりあげられなかつたものである。

理論的に見ると、企業の集中は、生産費を最低にすることであるならば、この計画を担当している政府当局は、規模の類似のものを合同せしめることをもつと主張したかもしれぬ。しかし、実際には、メリヤス工業のような分化した産業ではこのことは必ずしもつねに可能でなく、政府はこの方法をとりあげなかつたのである。したがつて、集中における中核企業が大企業であつて、吸収される企業は小企業であることは不可避的であつたといえよう。このように大企業は一般に有利とみられ、小企業はその大部分が主として販売団体として現状を維持したわけである。このような集中過程においては、勿論中核的企業の保護と同時に吸収された企業の保護も必要である。それはともかくメリヤス工業の実際の集中は、同一場所における企業間で行なわれるのは自然であつて、例えば、レスターシャでは、約四五〇のメリヤス企業が集中化されたのである。このうち三〇は、州外に生産を移したり、工場を閉鎖したといわ

れている。そして同じ割合が他の地方から入つてきたのである。ノッチンガムシャでは、企業の移動は少なかつた。しかし、州外に移転した規模は、州内に入つてきた規模より小さかつたので結果的には東中部地方のメリヤス工業における相対的地位はいくらか上昇したことになる。このような企業集中の結果、国内のメリヤス工業の地理的分布に根本的な変化は生じなかつたけれども、都市と準都市間の割合の変化はやや明瞭であつたようである。すなわち戦前には、東中部地方の小都市や若干の村落などでは、メリヤス工業が確実に伸びていたが、集中によつてその発展が阻止されたものと見られる。もしも長期的な企業集中の効果が、メリヤス工業の健全な分散傾向を阻止するものであるならば、それはのぞましくないことだといわなくてはならない。

九、戦後の問題と見通し

第一次大戦後と第二次大戦後とでは厳密な比較をゆるさないが、第一次大戦後にはメリヤス工業は拡張に向つたが、ブームは長つづきせず、一九二〇年には大きな不況を迎えたのである。第二次大戦後も同じように国内需要が増加するばかりでなく、欧洲諸国の戦災をうけた地域からの需要も加わつて、メリヤスの生産は増加していくものと考えられる。しかしながら、工場の設備や機械は、必ずしもそれに応じうるように整備していないのが現状である。編機の生産の合理化も要請されるが、遠い先の可能性としては、流行品向の平編機の海外依存度を減らすことが考えられている。またフルフアッション靴下については、伝染しない製造機の完成の可能性が主張されている。ほかの方面の技術的進歩はまだ表面化していないが、織物と編物との区別を困難にするような基本的な生産方法がとりあげられている。それは経編業における技術の進歩である。男子用スーツに実験されているが、この場合にはメリヤス特有の弾力性が却つて欠点となつていることが明らかになつたのである。しかし経編業における技術進歩は、やがて織物の領域

を漸次浸蝕していくものとおもわれる。

メリヤス工業の一般的な構造において、戦前からはつきりしていた傾向は、大規模な企業合同は起りえないとしても、全体として企業の規模は拡大していくものと考えられる。これは生産の増加のために必要と考えられるが、労働の供給や労働教育施設は充分とはいえないので、この方面の改善が必要となつてくるであろう。またそれと同時に、地域別の賃銀および労働条件の不当な格差を減少することも必要であろう。メリヤス製品の流通機構については、流通段階の企業の多すぎることも戦前から問題となつているが、生産者の卸売兼業には限度がある以上今後の合理化は予想しがたいともいえる。

すでに戦前からメリヤス製品の輸出依存度は減少してきていることを指摘したが、この依存度は戦後一時上昇したが、海外における低開発国の生産増加によつて今後の輸出増加が維持できるとは信じられない。イギリスの今後期待しうる輸出増加は主に毛製品に限定されるであろう。戦前のメリヤス輸出の三分の二は毛製品で、毛の靴下と外衣が主であつた。それはイギリス特有の熟練性、技術的便宜および適当な気候のためである。今後貿易自由化が促進される場合には、国内市場では、海外産の綿、絹および人造繊維品とはげしい競争をするであろうが、イギリスのメリヤス製品の海外への輸出は増大していくものと考えられる。